

日中対照言語学会

第27回大会（2012年度春季大会）のご案内

本学会では、下記の要領で2012年度春季大会を開催いたします。会員の皆さまには、お誘い合わせのうえ奮ってご参加下さい。また、会員以外の方の参加も歓迎いたします。

記

日 時：2012年5月27日（日）午前9時30分より午後5時30分まで
会 場：高千穂大学（東京杉並区）交通：京王井の頭線西永福駅下車、北へ徒歩10分
参加費：1000円（会員、非会員共通）

プ ロ グ ラ ム

受付	9:30-
	総合司会 山口直人（大東文化大学）
大会開催校挨拶	9:40-9:50
開会の辞 高橋弥守彦（大東文化大学）	9:50-10:00
研究発表1. “在+空間詞”の“在”に対応する日本語について 一文頭式と動前式の場合— 洪安瀾（大東文化大学院生）	10:00-10:35
研究発表2. 中国語アスペクト助詞“着”について 梁霽月（北京外国語大学院生・大東文化大学院交換留学生）	10:35-11:10
	以上司会 王学群（東洋大学）
休憩（10分）	11:10-11:20
研究発表3. 使役文と受身文の連続性を通して日中両言語の対訳を考える 一日中対照研究の視点から— 劉志偉（首都大学東京）	11:20-11:55
研究発表4. 中国語の訳文の誤用問題 白愛仙（明星大学非常勤）	11:55-12:30
	以上司会 豊嶋裕子（東海大学）
昼休み（60分 近くにレストランあり、昼食は受付にての注文も可）	12:30-13:30
研究発表5. 使役事象タイプと使役交替の可能性 —中国語の複合動詞における使役交替を通して 張楠（南山大学院生）	13:30-14:05
研究発表6. 日本語と中国語における状態変化を表す形容詞文について 李慧（筑波大学院生）	14:05-14:40
	以上司会 鈴木義明（早稲田大学）
休憩（20分）	14:40-15:00
研究発表7. 判断のモダリティから見た日中語の類型に関する一提案 王其莉（東北大学）	15:00-15:35
研究発表8. 接辞の機能：「自立化」および「複合阻止」という働き 井川壽子（津田塾大学）	15:35-16:10
研究発表9. “被字句”の中の「動詞+その他」について 高橋弥守彦（大東文化大学）	16:10-16:45
	以上司会 加藤晴子（東京外国語大学）
総会 安本真弓（高千穂大学）	16:45-17:15
閉会の辞 豊嶋裕子（東海大学）	17:15-17:30

日中国交回復40周年を共に祝いましょう！
※入会申し込み、学会開催当日に学会費の納入も受け付けます。（年会費：社会人 4000円、院生 2000円）

日中対照言語学会

第27回大会（2012年度春季大会）発表要旨

研究発表要旨

研究発表1. “在+空間詞”の“在”と対応する日本語訳 10:00~10:35

—「文頭式」と「動前式」の場合— 洪安瀾（大東文化大学院生）

中国語“在+空間詞”は文中における位置が比較的自由に、以下の例文のように、五つの位置に用いられる。

- (1) 当年在晋中插队，现在是北京某剧团的编剧，（語料庫《插队的故事》）
文革当時山西省中部の農村に移住したことがある男で、今は北京の劇団でシナリオを書いている。（語料庫『遙かなる大地』）
- (2) 在生人面前，她努力奋斗，努力给人家以聪明、大方、讲礼、讲理、文明可亲的印象。（語料庫《插队的日子》）
人前では聡明で上品で、礼儀正しく、道理をわきまへ、教養豊かに見えるよう、懸命に努力した。（語料庫『遙かなる大地』）
- (3) 泪水在上面划了一道一道……（語料庫《盖棺》）
汚れた顔に涙の跡が一筋、二筋……（語料庫『棺を蓋いて』）
- (4) 把凌凯搂在自己怀里。（語料庫《盖棺》）
凌凱を抱きあげた。（語料庫『棺を蓋いて』）
- (5) 生活里总会遇到一些烦恼和困扰，就像寒冷的冬天桎梏着心灵。那么，别忘了放一个春天在心里，心里是暖暖的，生活也会是色彩斑斓的。（南昌晚报 2011年11月14日 B24面）
活きているなら、たまたま嫌なことに絡まれて、嚴冬のように心が縛られる。だからこそ、心の中にいつも春のような気持ちを備えていれば、心の中は暖かく、周りも色鮮やかになるのだろう。（筆者訳）

例(1)では、“在”は文の本動詞である。本発表では、これを基本形式の“在字句”という。筆者は“在+空間詞”の位置により、例(2)から(5)までの“在+空間詞”を「文頭式」、「動前式」、「動後式」、「文末式」の“在字句”という。これらの形式は自由に交換することができない。

本稿は“在字句”の中でよく似ている「文頭式」と「動前式」について研究し、語用と構造的な特徴を明らかにする。

研究発表2. 中国語アスペクト助詞“着”について 10:35~11:10

梁霄月（北京外国語大学院生・大東文化大学院交換留学生）

日本語の「ている」は、日本語「継続相」のマーカである。中国語の“着”は、これ

までの先行研究では、研究者によって認識が多少異なるものの、中国語のアスペクト助詞であると考えられている。「ている」と“着”とが同じアスペクト助詞であることが、本稿対照研究の前提であり、出発点である。両者を比較する前に、まずそれぞれの言語環境において、「ている」と“着”の意味用法について考察しておきたい。

本発表では“着”の用法を中心に検討していく。“着”の用法に関連する先行研究は、今まで数多くあった。日本人向けの中国語教科書や語学研究者の著書など、様々な本で取り上げられてきた。十分に研究されているといっても過言ではない。しかし、“着”の定義をはじめ、用法の分類に関しては意見が分かれており、統一されているとはいえない。従来の研究では、「動詞＋“着”」に注目し、“着”のアスペクトの意味は“着”自身の持っているものか、或いは前にある動詞の性質に左右されるかをめぐり、盛んに議論がなされてきた。筆者は、以上のどちらの意見にも賛成しがたい。

本発表では、先行研究を踏まえた上で、“着”を改めて定義し、「出来事」の中の“着”という新たな角度から、連語の単位で“着”の意味について再検討し、再分類を試みる。字数の制限のため、本発表では“着”のみに焦点をしばり分析を行うが、「ている」の意味用法と両者の比較は今後の課題とする。

以上司会 王学群（東洋大学）

休憩（10分）

11：10－11：20

研究発表 3. 使役文と受身文の連続性を通して日中両言語の対訳を考える 11：20～11：55

一日中対照研究の視点から— 劉志偉（首都大学東京人文科学研究科日本語教育学教室）

統語的使役文と統語的受身文の連続性を通して、次の二つの角度からその対訳関係を考えることができる。一つは、日中両言語それぞれの言語の中で使役文と受身文の連続性が認められる場合である。もう一つは、一方の言語では受身文であるにもかかわらず、それをもう一方の言語に訳すと使役文が用いられる場合である。本発表は日中対照研究の視点から、日本語に軸を据え、中国語との対訳関係を体系的に捉えることを目標とする。具体的には、①主格に立つものにとっては結果としてある事態を許してしまった型、②「使役的授受」構文型（例：みんなに喜ばれる）、③「～ようにと言われた」「～動詞のテ形と言われた」型、④日本語の自発表現、⑤日本語の使役受身（誘発タイプ）の五つのタイプに触れ、これらの表現の日中対訳を体系的に捉えることを試みる。

研究発表 4. 中国語の訳文の誤用問題

11：55～12：30

白 愛仙（明星大学非常勤）

本発表では、東京都内のある集積所で見かけた張り紙における中国語表現の誤用問題から、学生の訳文の誤用問題をめぐり、訳文における原文の意味理解と訳文表現の特徴を分析し、複数の中国語の訳文表現を提案することで、中国語教育における訳文指導の重要な役割を論じる。

たとえば、“把”構文における動詞“分理”、“分类”、“分別”、“分离”、“分开”などが“处理”、“投放”、“放置”、“倾倒”、“丢弃”、“放”などの動詞との結びつきから、「分別して出す」の意味に対応する中国語の表現特徴を分析する。また、“非法”、“不法”、“违法”、“随意”、“到处”、“违规”などと“乱扔”、“乱倒”、“丢弃”、“扔掉”、“倒”、“扔”などの結びつきから、「不法放棄」の意味に対応する中国語の表現特徴を分析する。さらに、“总是”、“经常”と“维持”、“保持”の結びつきの特徴、“协组”、“协作”、“协力”などの使い分け、漢字の混用問題が表現の判断に影響を及ぼす現実の問題などについても議論する。

以上司会 豊嶋裕子（東海大学）

昼休み（60分 近くにレストランあり、昼食は受付にての注文も可） 12：30－13：30

研究発表 5. 使役事象タイプと使役交替の可能性 13：30～14：05

－中国語の複合動詞における使役交替を通して－ 張楠（南山大学院生）

中国語の単音節他動詞はほとんど結果を含意しないため(Tai1984)、使役交替が起こりにくい。複合動詞化すれば柔軟な使役交替が見られる。しかし、使役交替が起こりやすい(1a)もあれば、そうでない(1b)もある。

(1) a. 他烤焦了面包。→ 面包烤焦了。(焼き焦がす→焼け焦げる)

b. 他推开了那扇门。→ *那扇门推开了。(押し開ける→*押し開く)

本稿では複合動詞における事象間の使役関係を分類し、使役タイプと使役交替の生起との関係について考察する。以下の2点を主張する。

(i) 複合動詞には前項の使役事象と後項の結果事象の二つの下位事象を持つ。それらの間における使役関係を「同延使役」(LCS1 CAUSE LCS2)と「オンセット使役」(LCS1 INTINATE LCS2)に分ける(丸田1998に参考)。

(ii) 同延使役タイプは使役交替が起こりにくい。一方、オンセット使役タイプは使役交替が起こりやすい。

研究発表 6. 日本語と中国語における状態変化を表す形容詞文について 14：05－14：40

李慧（筑波大学院生）

本発表では、日本語と中国語の状態変化を表す形容詞文を取り上げ、その意味と構文の特徴について考察を行う。

<日本語：「形容詞の連用形＋なる」、「形容詞派生動詞」>

(1)a. 風や雨が強くなった。/風や雨が強まった。

b. 太郎が強くなった。/ *太郎が強まった。

<中国語：「变＋形容詞＋了」、「形容詞＋了」>

(2)a. 苹果变红了。/苹果红了。(リンゴが赤くなった。)

b. 墙变红了。/ *墙红了。(壁が赤くなった。)

例(1a)と例(2a)は自然な文であるが、例(1b)と例(2b)で示されるように、同じ述語であっ

でも、主語が替わると、非文となる。

本発表ではどのような性質が両構文の置換可能性に関わっているかを明らかにし、そして両言語におけるそれぞれの問題に統一的な説明を与えることを研究の目的とする。具体的には、日中対照の視点から、例文を提示しながら、両言語におけるこのような構文の意味的特徴を分析し、両者の異同を考察する。考察の結果、以下のことがわかった。

中国語の「形容詞＋了」構文と日本語の「まる」構文の制限は、
双方とも内在的コントロールから説明できる。

以上司会 鈴木義明（早稲田大学）

休憩（20分）

14：40－15：00

研究発表 7. 判断のモダリティから見た日中語の類型に関する一提案 15：00－15：35

王 其莉（東北大学大学院文学研究科 専門研究員）

これまで応募者は、評価判断と真偽判断のモダリティにおいて、日本語と中国語の比較対照を行ってきた。王（2012 予定）では、評価判断のモダリティの「なければならない」と“必須”を比較した結果、「なければならない」は事態の在り方を重視する表現であるのに対し、“必須”は事態の実質的な内容を重視する表現であることが分かった。また王（2011）では、真偽判断のモダリティの「はずだ」と“应该”を比較した結果、「はずだ」は根拠と結論の論理的な推論関係を提示する表現であるのに対し、“应该”は結論の内容そのものを提示する表現であることが分かった。本発表は、この二つの結果に基づき、判断のモダリティという視点から日中語の類型について考えるものである。その結果、「日本語は判断を行う時に、当該事態の在り方に責任を持つ言語であるのに対し、中国語は判断を行う時に、当該事態の内容に責任を持つ言語である」という日中語の類型を提案することができた。

参考文献

王其莉（2011）「日本語の「はずだ」と中国語の「应该」『国語学研究』50 東北大学大学院文学研究科

王其莉（2012 予定）「日本語の「なければならない」と中国語の“必須”『日中言語対照研究論集』14 日中対照言語学会

研究発表 8. 接辞の機能：「自立化」および「複合阻止」という働き 15：35－16：10

井川壽子（津田塾大学）

本発表では、日中の「自立化接辞」、「複合阻止接辞」とでも呼べるタイプの接辞をとりあげる。アルファベットに基づく西欧言語の研究の歴史が長い一般言語学においては、接辞の機能として、おおよそ品詞転換のためと意味を変化させるためという二つの機能のみが紹介されるのが普通である。たとえば、英語の派生接辞は、**disable** の **dis** のように語基に付加して異なる品詞の語をつくるか、**unkind** の **un** のように付加して異なる意味の単語にするかどちらかである。ところが、中国語では、たとえば、すでに名詞であるものに付

加し、さらに名詞を作っている「子」や「頭」などの用法（例：桌子、旗子などにおける「子」、石头における「頭」）が存在する。このため、接辞に課された第三の働きを精査しなければならない。単語として独立させるための「自立化接辞」、あるいは、それ自体は自立できるが、それ以上の大きな単位を作らせない「複合阻止」の働きである。日本語の接辞（お茶」の「お」、端っこの「こ」など）の例もとりあげ、接辞一般の定義および機能の問題を提起してみたい。

研究発表 9. “被字句”の中の「動詞+その他」について

16 : 10 – 16 : 45

高橋弥守彦（大東文化大学）

一般に“被字句”は5類に分けられる。筆者も“被字句”を5類に分けている。筆者の分類する「①-1」（受け手+“被/为”+仕手+“所”+動詞）“他被/为这本人物传记所吸引。”と「①-2」（受け手+“被”+仕手+動詞+“为/做/作/成”+名詞性語句）“黄河被中国人叫做‘母亲河’。”の受身のむすびつきは、文や分文の内部では他からの影響のある結果性や結論性を表す。「①-3」（受け手+“被/让/叫/给”+仕手+動詞+その他）“他被/让/叫/给这本人物传记吸引住了。”、「①-4」（受け手+“被/让/叫”+仕手+“给”+動詞+その他）“他被/让/叫这本人物传记给吸引住了。”、「①-5」（受け手+“被/给”+動詞+その他）“他被/给吸引住了。”では受身のむすびつきの中に、「動詞+その他」が現れ、両者でやはり結果性や結論性を表す。ただ、受身のむすびつきの“被”の前後に、その他の語句が加わると、結論性を表す場合が多くなる。

受身のむすびつきを表す標識としての“被”の前後に、その他の語句が加わり、結果や結論を表すと、“被字句”は動詞で文が終了できる。このことから、“被字句”は他からの影響のある結果性や結論性の現れる「動詞+その他」であれば、動詞でも文終了することができると言える。いずれにしろ、「動詞+その他」は平叙文としての結果性・結論性を出すための必須要素なので、“被字句”は命令文になれないと言える。

以上司会 加藤晴子（東京外国語大学）